

令和7年度

事業報告書

学校法人 村上学園

東 大 阪 大 学
東大阪大学短期大学部



目次

建学の精神と本学の使命	6
学園訓.....	6
本学の教育目的.....	6
本学の教育目標.....	6
3つのポリシー.....	7
東大阪大学アドミッションポリシー（入学者受入方針）	7
東大阪大学カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）	7
東大阪大学ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）	7
東大阪大学短期大学部アドミッションポリシー（入学者受入方針）	8
東大阪大学短期大学部カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）	8
東大阪大学短期大学部ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）	9
I. 法人の概要	10
1. 沿革	10
2. 法人事務局・学校所在地	11
3. 設置する学校・学部・学科及び学生・生徒・園児数（令和7年5月1日現在）	11
4. 役員・教職員等の概要（令和7年5月1日現在）	11
II. 事業の概要	12
東大阪大学・東大阪大学短期大学部	12
1. 入試改革	12
2. 広報活動の現状と充実	13
3. 教学改革	13
4. 「人間力」「生きる力」育成.....	13
【東大阪大学】	15
[1] こども学部こども学科.....	15
1. 在籍者数増加（募集力強化と退学者減少）	15
2. キャリア教育の充実	15
3. 教育者・保育者としての ICT 活用能力育成.....	15
4. 地域連携活動の推進	16
5. 自己点検・評価.....	16
[2] こども学部国際教養こども学科.....	16
1. 学生募集活動の強化	16
2. 広報戦略の強化（SNS 活用）	16
3. 語学教育・就職力の強化.....	16
4. 自己点検・評価.....	17
【東大阪大学短期大学部】	17
[1] 実践食物学科	17



1. 栄養士コースおよび製菓衛生師コースの資格取得支援の充実	17
2. 入学前教育による学生の意識改革	17
3. 初年次教育、リメディアル教育と ICT 活用教育	17
4. 同法人内の両高等学校との高大連携強化	18
5. 地域との連携強化(産学連携)による実践教育	18
6. 各種コンテストへのチャレンジ	18
7. 自己点検・評価	18
[2] 実践保育学科	18
1. 学科の目標	18
2. 複数担任制	18
3. 入学前教育の充実	19
4. 資格取得	19
5. 地域連携活動の推進	19
6. キャリア教育の充実	19
7. 卒業研究発表の充実	19
8. 退学者の減少	19
9. 3年制学生への支援	19
10. 自己点検・評価	19
[3] 介護福祉学科	20
1. 教育内容の充実と改善	20
2. 学生募集のさらなる強化	20
3. 学科発信の企画の充実	20
4. 自己点検・評価	21
【大学・短期大学部共通】	21
[1] 教学支援部	21
1. 各学科カリキュラム変更への対応	21
2. システム変更への対応	21
3. 自己点検・評価	22
[2] 学生支援部	22
1. 退学防止	22
2. 学生生活の安全・安心について	22
3. 新入生学外オリエンテーションの活性化	22
4. 障がい学生支援の円滑化	23
5. 学生イベント及び学生会・学友会の活動の充実	23
6. クラブ活動・同好会活動の充実	23
7. 卒業生のネットワーキング	23
8. 自己点検・評価	24
[3] 入試広報部	24



1. 入試広報戦略の検討と目標の実現	24
2. 指定校重視から総合型選抜重視への移行	24
3. オープンキャンパス（OC）学生スタッフ育成.....	24
4. 高校生入試活動長期化に対応した事務作業効率化.....	24
5. 留学生志願者増.....	24
6. 入試戦略についての情報共有.....	24
7. 自己点検・評価.....	24
[4] 総務部	25
1. 補助金の確保	25
2. 予算の適正管理.....	25
3. 施設設備の年次計画	25
4. 公的研究費の管理.....	25
5. 教育懇談会の開催.....	25
6. 後援会新旧役員会の開催.....	25
7. 自己点検・評価.....	26
[5] 図書館	26
1. 教育・研究に役立つ資料の収集と提供.....	26
2. 図書館各種企画事業	26
3. 急を要する配慮事項	27
4. 自己点検・評価.....	27
[6] キャリアサポートセンター	27
1. 就職・進学に関する指導や相談.....	27
2. 就職活動の支援と状況把握	28
3. 就職支援に関する講座等の実施.....	28
4. キャリア教育の推進／インターンシップ支援.....	28
5. 就職先の開拓・拡充／教職員による研修等の参加／センターとしての事業開拓..	29
6. 自己点検・評価.....	29
[7] 基盤教育研究センター.....	30
I. 成果と課題.....	30
1. 初年次教育として関連授業や講座の実施	30
2. 「就職に直結する学力」と関わる授業の実施.....	30
3. リメディアル教育として次の学習活動を計画・実施.....	30
4. 日常的な実践・研究を通じた具体的かつ意味のある教育方法の調査と提案	31
II. 自己点検・評価.....	31
[8] 保健センター	31
1. 感染症対応	31
2. 健康診断.....	31
3. 外傷・疾病・健康相談への対応	32



4. 保護者面談.....	32
5. 啓発活動.....	32
6. 進路支援.....	33
7. 自己点検・評価.....	33
[9] こども研究センター	33
1. 「こども広場」	33
2. 「親子で遊ぼう」 土曜日（月1回）	35
3. 「こども応援ひろば」	35
4. 自己点検・評価.....	36
[10] 異文化交流室	38
1. チューター制度.....	38
2. 留学生、学生、卒業留学生、卒業生、チューター、教員参加の交流会.....	38
3. 地域の学生との交流促進・各種語学関連のスピーチコンテストの支援.....	38
4. 第7回国際交流料理大会	39
5. 国際交流センター共催クリスマスパーティ.....	40
6. 自己点検・評価.....	40
[11] 産官学地域連携室	40
1. 東大阪市連携6大学公開講座.....	40
2. 高大連携事業	40
3. 自己点検・評価.....	40
[12] 公開講座.....	41
1. 令和7年度公開講座	41
2. 自己点検・評価.....	43
[13] FD・SD委員会	43
3. 自己点検・評価.....	44
[14] 国際介護福祉学研究センター	44
1. 論文誌の発行	44
2. 介護福祉学ランチョンセミナー実施.....	44
3. 介護福祉学科との公開講座共同開催.....	44
4. 村上学園介護相談室の設置	44
5. 自己点検・評価.....	44
[15] 教養教育委員会.....	44
1. 定期語学試験	45
2. スピーチコンテスト（弁論大会）	45
3. 自己点検・評価.....	45
[16] IR委員会.....	45
1. 授業アンケート回収率の向上.....	45
2. 自己点検・評価.....	45



Ⅲ. 学園財務の概要.....	47
1. 事業活動収支計算書（令和5年度から令和7年度）	47
2. 貸借対照表（令和5年度から令和7年度）	48
3. 財務比率（令和5年度から令和7年度）	48



建学の精神と本学の使命

開学の祖、村上平一郎先生が学園の設立を志されたのは、「健康にして聡明、情操豊かにして強い生活力を持った人材を育成する」ためであり、この目標を生かすべく「萬物感謝・質実勤労・自他敬愛」の学園訓を掲げられた。この建学の精神は時代の変化を超えて不偏性を持つものであり、本学が実践に努めている「学問を通して人間を作る教育」の支柱となっている。

本学の使命は、建学の精神を継承し、大学学則第1条（目的）、第3条の2（各学科の人材養成目的）、短期大学部学則第1条（目的）、第5条の2（各学科の人材養成目的）に従い、教養科目並びに専門科目に関する教育と研究を通じて、社会の良き形成者を育成し、世界文化の発展と人類福祉の向上に貢献することにあるのはいうまでもない。

学園訓

萬物感謝

「私は、自分以外のすべてによって生かされている。ありがたいことだと感じること。」

私たちが生きていくには、大きく考えれば宇宙全体の力で生きていると言えます。私たちは、空気や太陽、自然界の色々な恵みによって生かされています。言い換えると、宇宙全体のおかげで、自分が今ここに生きているのです。私たちは、萬物のおかげによって、生きているのです。したがって、物を大切に、すべての命を大切に、感謝する心を持つことが大切です。

質実勤労

「かざり気がなく、真面目に、自分の仕事に精を出し、努力すること。」

科学技術の進歩、高度情報化社会の時代に、将来、社会に役立つ立派な人になるためには、陰日なたなく努力し、自分に与えられたことに対して責任を果たすことです。真面目に、日々の努力を積み重ねる必要があります。そのためには、精神力と身体を鍛え、持っている力を十分発揮できるように努力することが必要です。

自他敬愛

「かけがえのない自分を大切にすることはもちろんのこと、他人も大切にすること。」

今、地球上には数多くの人間が生存していますが、自分というものは、世界でたった一人のかけがえのない存在です。それと同様、他人もまたかけがえのない存在です。自分というものは、他人がいなくては生きていけないし、他人によって生かされていることを自覚し、相手の立場をお互いに理解しあうことが大切です。（村上靖平理事長 入学式告辞より）

本学の教育目的

本学は、教育基本法並びに学校教育法の示すところに従い、村上学園建学の精神と伝統に基づき、学問を通して人間を作る教育をめざすとともに、大学においては、子どもに関する総合的な学芸を教授研究し、豊かな実践力を身につけた有為な人材を育成することを目的とし、短期大学部においては一般教養とともに食物、保育及び介護福祉に関する実際的な専門の学芸を授け、家庭・社会の良き形成者を育成することを目的とする。

本学の教育目標

大学…広い教養と豊かな情操を備え、子どもに関する専門的知識、技能を身につけ、子どもの視点に立って子どもの育ちを総合的に援助できる人材を育てる。

短期大学部…「学問を通して人間を作る教育」の実践を図り、知識や技術に偏重することなく、広く社会に貢献できる人間性豊かな人材を育成する。



3つのポリシー

東大阪大学アドミッションポリシー（入学者受入方針）

こども学部こども学科

子どもをめぐる諸問題に意欲的に取り組める人、知的関心と豊かな情緒によるコミュニケーション能力を持つ人、事象や問題点を正確にとらえて意味づける力を持ち、筋道だった考察と表現ができる人を望みます。

日本だけでなく、国際的な視野を持ち世界各国および地域の子どもをめぐる諸問題に意欲的に取り組める人、知的関心と豊かな情緒によるコミュニケーション能力を持つ人、事象や問題点を正確にとらえて意味づける力を持ち、筋道だった考察と表現ができる人を望みます。

東大阪大学カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）

東大阪大学では、その教育理念に基づき子どもをめぐる諸問題に取り組むことができ、次代を担う子どもの健全育成に貢献できる人材を養成するため、以下のような方針に基づいてカリキュラムを編成しています。

こども学部こども学科

1. 広範で多様な基礎知識と子どもを学ぶために欠かせない豊かな人間性を養うため、人文・社会・自然・総合・外国語・保体科目に区分した全学に共通する教養科目を設置する。
2. こども学を修めるにあたり必要な専門知識及び技能を習得するため、必修・基礎選択・選択・3、4年次専修科目に区分した専門科目を設置する。
3. こども学を修めるとともに、教育者としての免許状及び保育士証を取得するため、自由選択科目を設置する。
1. 広範で多様な基礎知識と子どもを学ぶために欠かせない豊かな人間性を養うため、人文・社会・自然・総合・外国語・保体科目に区分した全学に共通する教養科目を設置する。
2. こども学の専門知識に基づいて国際社会の価値観《国際文化》を学びながら世界に通用するビジネス専門知識《経営・経済》と卓越したコミュニケーション能力《語学力》を養い、必要な専門知識を習得するため、必修・基礎選択・3、4年次専修科目に区分した専門科目を設置する。

東大阪大学ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）

東大阪大学で以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生は、卒業が認定されます。

こども学部こども学科

1. 人類はもとより生きとし生けるものに対し、優しい気持ちで接する心を持ち、生きているものを大切にすることをもち、次代を担う子どもの健全育成に貢献できる人となる。
2. 社会人として必要な教養と子どもに関する専門知識及び技能を習得し、広い視野で考える力、主体的に課題を見つける力を身に付け、子どもの立場に立って考え、発言し、社会に貢献できる人となる。
3. 人や地域から恩恵をうけていることを喜び、感謝するとともに、相手の立場に立って考えることを教え、人の痛みがわかる人となる。



1. こども学の専門知識をグローバルな視野で追究すると同時に、世界に通用するビジネス専門知識を学び、社会及び市場変化を的確に把握し、かつ課題解決に施策を提案できる複合的人材となる。
2. 国際連携をモットーに、国境を越える多面的な交流により、国際社会の多様な価値観を学びながら、世界の子ども、世界の中の日本に関する諸問題と諸知識を探求・習得し、世界の社会、文化、歴史、経済、環境などに強い関心を持ち、かつ異文化が理解できる世界観を有する人となる。
3. 幅広い教養知識の習得と徹底した語学指導により、企業及び国際社会を舞台に高度な実践的語学力で活躍できる国際性豊かな人となる。

東大阪大学短期大学部アドミッションポリシー（入学者受入方針）

実践食物学科

食物や栄養に関心を持ち、専門知識と技能を得て、将来の生活に役立てたいと考えている人、「食」をめぐる社会環境について見識を深め、食物栄養の分野で「人」の「健康」にかかわって社会で活躍したいという意識を持った人を望みます。

実践保育学科

“子どもが好き”であることは必須条件であるが、それだけではなく、教育・保育の場は専門的な知識と技術、立派な人格を備えた「人物」が求められる社会であることを認識し、その目標達成のために積極的に学び、成長しようとする人を望みます。

介護福祉学科

介護に関心を持ち、介護を必要とする人の立場にたって理解できる素養を身につけている人、介護に関する知識を深め、介護分野において社会的にも貢献しようという意欲のある人を望みます。

東大阪大学短期大学部カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）

東大阪大学短期大学部では、実践食物並びに幼児教育及び幼児保育、介護福祉に関する実地的な専門の学芸を授け、家庭・社会の良き形成者を育成するため、以下のような方針に基づいてカリキュラムを編成しています。

実践食物学科

1. 多様な基礎的知識と、基本的な学習能力の獲得のため全学に共通する一般教養科目を設置する。
2. 食の大切さを学び、健康で豊かな食生活が送れるように積極的に努力し、実践できる能力を養い、社会的に貢献できる人材を養成するため専門科目を設置する。
3. 食に関する科目を修めるとともに、教育者としての免許状を取得するため、教職科目を設置する。

実践保育学科

1. 多様な基礎的知識と、基本的な学習能力の獲得のため全学に共通する一般教養科目を設置する。
2. 幼児期における教育及び保育に関わる者に求められる深い知識を習得し、人間的に豊かな人材を養成するため専門科目を設置する。
3. 幼児期における教育及び保育に関する科目を修めるとともに、教育者としての免許状及び保育士としての保育士証を取得するため、教職科目を設置する。

介護福祉学科

1. 職業人としてふさわしい教養と思考力を養うために、一般教養科目を設置する。



2. 介護人材として相応しい教養、制度を修得する専門「人間と社会」領域科目を設置する。
3. 介護の基本・全体像、介護技術等を修得する専門「介護」領域科目を設置する。
4. 介護に必要な周辺知識を修得する専門「こころとからだのしくみ」領域の科目を設置する。
5. 医療的ケアに必要な知識・技術を修得する専門「医療的ケア」領域の科目を設置する。
6. 介護福祉士養成施設としての科目を構成する。
7. 学生負担及び学修順序を考慮した配当年次を構成する。

東大阪大学短期大学部ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）

東大阪大学短期大学部で以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生は、卒業が認定されます。

実践食物学科

1. すべてのことに感謝の気持ちを持ちながら、健康を維持するために食生活全般に興味・関心を持つことのできる人となる。
2. 常に向上心を持って努力し、多様な分野で広い視野を持って活躍できる人となる
3. 自分を大切に健康維持に努めるとともに、他の人にも心を配って社会に寄与・貢献できる人となる。

実践保育学科

1. 人間が生きていくことの意味を伝え、自然に対する畏敬の念を抱き、それを守り、科学や文化、芸術に対する感受性を伸ばすことのできる人となる。
2. 勉強や仕事をすることは、即ち文化の継承だとの認識に立ち、物を大切に、健康の大切さを認識し、精神的な豊かさの重要性を伝えられる人となる。
3. 世界には多様な価値観があることを教え、差別やいじめを許さない心を育て、自分の大切さ、ひいては他人を理解することの大切さを伝えられる人となる。

介護福祉学科

1. 一般教養だけでなく、人間の尊厳・倫理観を兼ね備え介護人材としての教養を備えていること。
2. 社会の在り方から介護保険を中心とした各種制度を理解していること。
3. 介護の考え方、介護のコミュニケーション、介護計画の立案等、介護の基本を確実に修得していること。



I. 法人の概要

1. 沿革

昭和15年	12月28日	財団法人村上学園設置認可
16年	4月1日	布施高等女学校開校
22年	4月1日	布施高等女学校附属中学校開校
23年	4月1日	新制高校の発足により布施学院高等学校と改称
24年	2月15日	布施女子高等学校、同中学校と改称
26年	3月13日	財団法人村上学園は学校法人村上学園となる
28年	4月22日	学校法人村上学園布施女子高等学校附属幼稚園開園
38年	4月1日	学校法人村上学園柏原女子高等学校開校
39年	1月25日	学校法人村上学園柏原高等学校と校名変更、男子部を併設
40年	1月25日	布施女子短期大学家政科設置認可を得、開学
41年	1月25日	布施女子短期大学保育科を増設
42年	4月1日	東大阪高等学校・同中学校・東大阪短期大学・東大阪短期大学附属幼稚園と校名変更
43年	4月1日	家政科を家政学専攻と食物栄養学専攻に分離認可
44年	4月1日	保育科を幼児教育学科に改称（47年3月廃止）
45年	2月9日	児童教育学科設置認可を得、同年4月1日開設
45年	4月1日	家政学専攻を服飾デザイン専攻に改称 柏原高等学校、女子部を廃止
48年	4月1日	児童教育学科を初等教育学と幼児教育学に専攻分離
63年	3月31日	東大阪中学校廃校認可を得、廃校
平成11年	7月28日	児童教育学科の初等教育学専攻の募集停止届出
12年	3月1日	家政学科に生活福祉専攻設置認可を得、同年4月1日開設
13年	3月31日	児童教育学科の初等教育学専攻廃止届出
13年	5月15日	校名変更認可、平成14年4月から東大阪高等学校を敬愛女子高等学校と改称
14年	4月1日	児童教育学科を幼児教育学科に、服飾デザイン専攻を生活デザイン専に名称変更
14年	12月19日	東大阪大学設置認可、平成15年4月1日開学 校名変更認可、平成15年4月から東大阪短期大学を東大阪大学短期大学部と改称
15年	1月24日	校名変更認可、平成15年4月から東大阪短期大学附属幼稚園を東大阪大学附属幼稚園と改称
15年	4月1日	東大阪大学こども学部こども学科開学
18年	4月1日	敬愛女子高等学校を東大阪大学敬愛高等学校に名称変更 柏原高等学校を東大阪大学柏原高等学校に名称変更 東大阪大学短期大学部家政学科を健康福祉学科に、食物栄養学専攻を健康栄養専攻に名称変更 家政学科生活デザイン専攻を平成18年度より募集停止
19年	3月31日	家政学科生活デザイン専攻廃止届出
22年	3月31日	東大阪大学敬愛高等学校商業科廃止
22年	4月1日	健康福祉学科を健康栄養学科に名称変更 健康栄養学科生活福祉専攻を平成22年度より募集停止
23年	3月31日	健康栄養学科生活福祉専攻廃止
23年	4月1日	東大阪大学こども学部アジアこども学科開設
28年	4月1日	東大阪大学短期大学部健康栄養学科を実践食物学科に、幼児教育



学科を実践保育学科に名称変更
 30年 4月 1日 東大阪大学短期大学部介護福祉学科開設
 令和 3年 4月 1日 東大阪大学こども学部アジアこども学科を国際教養こども学科に名称変更

2. 法人事務局・学校所在地

法人事務局 〒577-8567 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1
 大学・短期大学部 〒577-8567 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1
 東大阪大学敬愛高等学校 〒577-8567 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1
 東大阪大学柏原高等学校 〒582-0001 大阪府柏原市本郷 5 丁目 993
 東大阪大学附属幼稚園 〒577-0044 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1

3. 設置する学校・学部・学科及び学生・生徒・園児数（令和7年5月1日現在）

学校名	学部・学科名	学生・生徒・園児数
東大阪大学	こども学部	259
東大阪大学短期大学部	実践食物学科	80
	実践保育学科	41
	介護福祉学科	215
東大阪大学敬愛高等学校	普通科（全日制課程）	659
東大阪大学柏原高等学校	普通科（全日制課程）	462
東大阪大学附属幼稚園		250
合計		1,966

4. 役員・教職員等の概要（令和7年5月1日現在）

- (1) 役員 理事 7人 監事 2人（任期：令和7年7月3日）
- (2) 評議員 15人（任期：令和7年7月3日）
- (3) 教職員 346人

	教 員		事務職員		合 計
	専 任	非常勤	専 任	非常勤	
法人部門	0	0	10	3	13
東大阪大学	22	23	14	12	71
東大阪大学短期大学部	29	29	14	2	74
東大阪大学敬愛高等学校	47	21	7	8	83
東大阪大学柏原高等学校	42	9	11	11	73
東大阪大学附属幼稚園	17	5	5	5	32
合計	157	87	61	41	346



Ⅱ. 事業の概要

東大阪大学・東大阪大学短期大学部

建学の精神及び本学の使命である「学問を通し人間をつくる教育」を達成するため、学科ごとに「卒業認定に関する方針」「教育課程編成及び実施に関する方針」「入学者の受け入れに関する方針」の3ポリシーを明確に定め、教育活動・学生支援に努めてきた。

3つのポリシーをもとにした大学・短期大学部の改革案を、「将来構想委員会」をもとに熟議するとともに、オブザーバーとして若手・中堅教員も加えて意見交流を行い、赴任後間もない教員からの提案も管理職が把握できる体制作りを進めた。提案内容は、学園の中期計画に照らし合わせながら優先順位を定めて設定した。

とりわけ、第3期中期計画で示された「<大学の目指すビジョン>3.『地域に根差した地域に愛される大学として、地域と繋がり貢献できる大学を目指す』」を重視し、短期大学部開学60周年行事、地域行事のコラボレーション、地域人材と学生の交流を促進する「プロボノ人材バンク」の創設に取り組んだ。さらに、教職員と地域とのつながりを深めるため、積極的に地域イベントに参加し、地域との交流・つながりをさらに深めた。

また、学園訓にも通ずる「人間力」「生きる力」の育成を掲げ、学外の多様な人材・機会と学生を結び付けられるよう、各学科に依頼した。

ガバナンス及びコンプライアンスの強化も進めた。令和7年度における留学生入試において、公平性や公正性を欠く入学者選抜を実施していたが、全ての入試区分において公平・公正な入学者選抜を実施できるように改善し、文部科学省の指導のもと、入試改善計画を進めた。

令和7年度重点項目

1. 入試改革

入学定員の充足を目指し、全学科充足率80%以上を最低の目標として募集活動を進めてきた。留学生入試の志願者が多い介護福祉学科、野球部入部希望者の多くがスポーツ推薦入試で受験する国際教養こども学科は、入学定員を充足した。実践食物学科は昨年度より少し増加したが充足率80%にわずかに届かず、こども学科は60%程度の充足率となった。大学においては、実践保育学科への進学を希望していた生徒を、大学（こども学科）への入学に目を向けさせることができず、内部進学者としては前年度の16名から11名へと減少した。

指定校での受験者が減少し、本学志願者層が指定校入試より早い時期での受験を望む傾向はさらに強まった。この傾向は前年度から予想されていたため、総合型選抜Ⅰ期・Ⅱ期のオープンキャンパス参加型入試では、早期出願検定料・入学金減免を実施した。その結果、同時期のオープンキャンパス参加型入試において、実践食物学科では出願者が3名から9名へと増加し、受験生のニーズに対応した入試制度変更であったと言える。そのため、次年度は対象をⅢ期まで拡大して実施する。

大学・短期大学部全体としては定員充足率が91.6%と、100%には届かなかったものの全教職員の協力が成果として現れた。



2. 広報活動の現状と充実

広報活動では、資料請求からオープンキャンパス参加への導線が弱く、早急な改善策が必要である。

また、大学編入学生の定員を現状に見合ったものに変更するため、令和8年度募集より編入学定員を10人から3人に変更し、大学収容定員を360人から346人に削減する届出をした。

このような状況下で、課題となっている広報活動を充実するために下記のような取り組みを実施した。

①入試広報部の組織体制や業務内容の改善

- ・業務分担表の作成と、それに沿った業務を実行した。
- ・年間業務の流れを可視化した。
- ・各業務のワークフローを示した。
- ・日報による情報共有を行った。

②オープンキャンパスの充実

- ・オープンキャンパスをより魅力的なものとするために各学科で工夫した。
- ・学生スタッフや教職員の参加者に対して「おもてなし対応」を強化した。
- ・当日参加者全員を一堂に集めて学長が個別挨拶や全体挨拶を行うことによって、本学のアットホームな雰囲気や魅力をアピールするとともに、継続した情報発信に努めた。
- ・オープンキャンパスの後半にケーキバイキングを実施するなど実践食物学科の魅力と集客にさらなる工夫をした。

③各学科の魅力をフライヤーにまとめ、広報活動に活用した。

④各学科からのブログやInstagramを発信し、学科の特色をアピールした。

⑤入試広報部による戦略的な学校訪問を実施し、広報活動の充実を図った。

3. 教学改革

新学務システムの導入に伴い、シラバスの入力項目、学生の授業アンケート項目を精査した。学園訓から導かれる9つの力と科目の関係を記し、学生がディプロマポリシーの達成度を自身で把握できるようにした。

大学は、本学独自の制度である「ミータイム」を設け、1・2年次の1限目に授業を入れず、その時間を様々な活用できるようにするとともに、朝の時間にゆとりを持たせ、学生の学びやすさに繋げるサポートを実現した。アドバイザーによる面談時間、実習指導の補講、クラブ活動などに有効活用されている。運用から1年を経過したため、制度の意義を検証し、より有効活用できるように工夫する。

4. 「人間力」「生きる力」育成

令和7年度より、本学は新たな改革として「つながり」をテーマにした、より実践的で魅力的な学びの場へと進化するための土台づくりを行った。

現代社会は急速に変化しており、このような変化の時代に問われる力として「人間力」や「生



きる力」を位置付けた。本学では、このような「つながり」や「体験・経験」を重視したカリキュラムと、それらを実現する場の提供を通して、学生の「人間力」や「生きる力」を育成する。その準備として下記の二つを実現した。

①プロボノ人材バンク構想

令和7年8月に「プロボノ人材バンク」を設置した。学生がこの人材バンクに登録された方々との講座を通じて新たな出会いやつながりを得ることで、活動の経験や体験を通じて「人間力」や「生きる力」を育むことを目指す。また、地域貢献の一環として、地域人材が本学の教育活動に参加する機会を設ける。登録されたプロボノワーカーにとっても、この活動がやりがいや生きがいとなり、そのような社会貢献活動を通じて地域の活性化にもつながることを期待している。本事業は、今年度から段階的に準備を進めており、令和8年度から本格的に活動を始める。

②客員教授として岡崎茂美氏、呉真由美氏を登用。

客員教授として来ていただく岡崎茂美氏、呉真由美氏には、「人間力」「生きる力」育成のために令和8年度から前後期各1コマずつ授業を持っていただくことになった。



【東大阪大学】

[1] こども学部こども学科

1. 在籍者数増加（募集力強化と退学者減少）

- ・ こども学科志望オープンキャンパスには複数回の参加が多い傾向であり、オープンキャンパス参加から受験した割合は高くなっている。
- ・ オープンキャンパス参加高校生と在学生の話す機会は一定提供した。
- ・ インスタグラムフォロワー数 1296 名となり、昨年の 1134 名から伸びている。広報学生を組織化し、中西先生を中心にインスタグラムの発信はほぼ毎日行われており、楽しい内容を提供できているが、広告などを行い、個人に届ける必要がある。
- ・ 今年度からコース制を設置し授業内でもコース別課題を設定するなど、特色あるカリキュラムを意識している。1.2 年次に 1 限目を空きコマとする me time は、オンライン学習の時間確保、通信制高校や遠方の学生へのニーズに応える試みとなっている。
- ・ 敬愛高校 3 年生に年間を通して 16 回の高大連携の授業を実施した。

2. キャリア教育の充実

- ・ 2024 年度より開設した「地域連携とフィールドワーク」では、学生たちが様々な地域活動を行い、学期末には発表を行った。地域に東大阪大学をアピールする機会となり、今後とも充実化を図る予定である。大学行事での活動が増えており、もっと地域に出ていくプログラムを策定すべきである。
- ・ 教員採用試験対策としてキャリアサポートセンターによる支援を経て、教員採用試験の 4 名（小学校教諭 4 名）の合格者が生まれた。
- ・ 3 年次後期の幼稚園実習を昨年度から、1 年次 2 週間、3 年次 2 週間とするカリキュラムへの変更をした。1 年次の実習は不安もあったが、幼稚園教諭の基礎的資質を早くから理解をする経験となったと評価する。より綿密な幼稚園との連携、質の高い保育の体験ということについては課題がある。
- ・ 就職については概ね 100% となっており、キャリア形成の授業などを通じた取り組みが実っていると考える。また学生たちが、見学やインターンシップを通じて就職を決定しており、より自分に合った就職先に繋がっている。
- ・ 目標とした 1・2 年次からのキャリア形成活動の強化は、me time を使ってこども研究センターの活動への参加やこども学やキャリアを考える授業を通して意識した内容を行っている。さらなる 1.2 年生の就労への意識づくり、地域連携を強めることが必要である。
- ・ 国際教養こども学科とのシームレスな教育はキャリア形成とインターンシップ、地域連携フィールドワーク、こども学などで実施しているが、他の科目でも連動をしていくことを検討すべきである。

3. 教育者・保育者としての ICT 活用能力育成

- ・ 教育・保育現場での ICT 活用スキル育成について、小学校教員志望学生の授業では、タブレットや PC を活用した授業運営について実践的な指導ができ、GIGA スクール構想下の



小学校で即戦力となる教員の育成が継続して進められている。

- ・ 模擬授業を重視し、ディプロマポリシーに掲げている「広い視野で考える力、主体的に課題を見つける力を身に付け、子どもの立場に立って考え、発言」することを実践した。

4. 地域連携活動の推進

- ・ 「こども応援ひろば」では新たに子育て支援企業によるブースを設置した。6社がブースを出展した。出展企業とはその後も大学祭や教員との共同研究で繋がりを持ち続けている。地域の企業の活動に学生が関わることにより、ディプロマポリシーに掲げている「人や地域から恩恵をうけていることを喜び、感謝するとともに、相手の立場に立って考える」を実践した。
- ・ 若井産業とこども研究センターでの地域連携プログラムでは、3年生の学生が参加し、くぎを使った遊びを地域の人たちと実施した。
- ・ UNIQLO とのコラボを今年も実施している。企業からも学生へアプローチする機会を設定し、国際的な貧困への学びやキャリアを意識する機会となった。

5. 自己点検・評価

オープンキャンパス参加学生増加に向け、募集重点校へのアプローチが強化すべき取り組みといえる。me time、少人数の温かい大学、キャリアに強い大学などの強みをさらに伝えていく必要がある。

学生の精神的な不安定さへの対応や授業等への配慮が増加しており、保健室やカウンセラー、障がい学生支援委員会との連携を強めていく必要がある。

[2] こども学部国際教養こども学科

1. 学生募集活動の強化

本年度の学生募集活動は、学科定員25名のところ36名の新入生を迎えることができた。その内、留学生は、15名であった。本学科の教育の特色である多文化共生と国際性豊かな学習環境に相応しい学生構成であったと考える。

学生募集活動で特に力を入れたことは、高校生、留学生ともに共通して親しんでいる SNS の内、Instagram の投稿に担当教員を任命し、積極的に学科における授業や学内外活動を投稿した。さらに、“いいね”を押してくれた生徒には、さまざまな情報提供や友達紹介の依頼等を行った。この活動は、特に留学生の獲得に効果を発揮した。

2. 広報戦略の強化 (SNS 活用)

学科における授業や学内外活動をフェイスブック、Instagram を活用し、積極的に投稿を行った。特に海外の大学とのオンライン交流活動や外国人高校生の大学見学等の国際交流活動のシーンを多く投稿した。これらの投稿により、本学科の特徴をよく理解し、入学を決定した生徒も多数おり、結果、前年比124%の新入生の獲得に繋げることができた。

3. 語学教育・就職力の強化

学科の就職力強化のために語学教育強化の一環として、毎月1年生から3年生全員に語学定期試験を実施した。内容は、日本人学生には、TOEIC 模擬テスト、外国人および渡日学生



は、BJT（ビジネス日本語試験）模擬テストを行っている。各模擬テストの結果（点数）に順位をつけ学内掲示板に貼り出し学生の競争心を高め、語学力向上を図った。加えて、2年次よりSPI3の模擬テストを実施した。3, 4年次生は、この継続的なSPI3の学習によって、日本人学生、留学生ともに就職率ほぼ100%を達成した。特に公務員、公共団体、上場企業という難関を突破する学生も多数いた。

4. 自己点検・評価

- (1) 本学科のアカデミックな国際文化学習の機会創出のため、学外講師による海外体験講演会を複数回開催した。これらの活動により、多くの学生の自主性と国際性を育めたと考える。今後、学生の興味ある課題を抽出し講演者を募り、講演会を開催していくことや海外の学生との交流の場をより多く提供していきたいと考える。
- (2) 学科学生の基礎学力、教養知識、語学力の強化のため、引き続き教育関連企業の協力の下、SPI3の模擬試験を継続的に行い、本学科の学生の就職力の高さが高校生や留学生および保護者にアピールできるよう今後とも積極的に実施していきたい。

【東大阪大学短期大学部】

〔1〕実践食物学科

1. 栄養士コースおよび製菓衛生師コースの資格取得支援の充実

栄養士免許、製菓衛生師試験受験資格は全員取得できた。教員免許の中学校第二種（家庭）5名、栄養教諭6名取得。食品科学技術認定証は両コース合わせて27名が取得した。テーブルコーディネーター初級は両コース合わせて7名が受講した。栄養士実力認定試験は4名受験し全員A判定であった。

2. 入学前教育による学生の意識改革

「学びの泉」（学内 E-Learning）を活用した入学前教育を実施している。卒業研究等を動画で視聴することで、新たな学習方式を視覚的に認識するとともに、入学前に学生の意識を改革することを目指した。同時に、ICT活用教育WEB式リメディアル教育ツール「ひがドリ」（E-Learning）の「基礎編」を入学前教育の必須課題とし、基礎学力向上を図っている。

3. 初年次教育、リメディアル教育とICT活用教育

初年次教育としてリメディアル教育と「ひがドリ」ならびに Google による大学向け無料 Web サービス「Google Classroom」を活用して、専門科目の理解の補助となる科目（数学等）や就職活動に結びつく科目等（国語、一般常識）を中心に継続的に取りまわせることで、基礎学力向上を継続している。



4. 同法人内の両高等学校との高大連携強化

本学の系列校である東大阪大学敬愛高等学校、東大阪大学柏原高等学校で、複数の授業を本学科の教員が担当することにより、栄養士あるいは製菓衛生師を目指す動機づけを行い、内部進学を促した。その結果、両校より16名が受験し合格した。

5. 地域との連携強化(産学連携)による実践教育

11月8日(土)「こーばへ行こう!2025」のマルシェのイベントとして、株式会社イゲタ金網の場所を借りて、東大阪市の名産でもある小松菜入りのキーマカレー(栄養士コース)とマドレーヌ(製菓コース)を製作して販売をした。また同日、「はなのわ文化祭」にも実践食物学科から参加した。11月23日に河内長野市の道の駅「くろまろの郷」で開催された「2025収穫祭」にも参加をして、バターナッツカボチャを使用した具沢山のかぼちゃスープとマドレーヌを販売した。発案、試作から製作、販売を実践し、卒業研究ではその取り組んだ成果を発表した。6月21日に東大阪市保健所主催の「食育フェスタ」にも参加した。新たな取り組みとして「こども食堂」を12月より月に2回開始する。

6. 各種コンテストへのチャレンジ

今年度も授業の一環として学科の特性を活かした食にまつわるコンテストに積極的に応募した。「葉酸たまご甲子園」コンテストに栄養士コースの2年生1チームが参加した。第11回食物アレルギー対応食料理コンテストに2年生1チームが応募した。第23回「ザ・地産地消料理コンテスト」に栄養士コースの1年生全員が応募した。第7回東大阪大学「国際交流料理大会・世界の麺料理」に本学から4チーム(9名)参加した。

7. 自己点検・評価

教育面においては、学外実習を計画どおり実施し、学生の実践的能力の向上に一定の成果を得た。特に、「食」に関連する職業への理解を深め、進路選択に対する意識の醸成につながった点は重要である。活動面においては、外部イベントへの参画及び道の駅における商品開発に取り組み、所期の成果を収めることができた。さらに、地域貢献としての「こども食堂」を今年度後期から実施できた。これらの活動を通じて、SDGsの理念に基づく取り組みにも着手し、食生活全般に対する関心の喚起とともに、社会に貢献し得る人材の育成に寄与した。以上の成果は、学生の社会的自立および活躍の場の拡大に資するものであり、三つのポリシーを踏まえた今後の教育・活動の推進に向けた指針となるものである。

[2] 実践保育学科

1. 学科の目標

目標達成のため、入学者全員が卒業までに幼児教育ならびに乳幼児教育の在り方を理解し、責任感のある有能な保育者として巣立つことを意識した。

2. 複数担任制

教員が一丸となって連携し、学生一人ひとりに個別指導と支援を行い、一人ひとりが自分の目標に向かい努力するように指導を行った。アドバイザー教員やコーディネーター教員が学生と面談をし、必要な場合は保護者とも懇談を行い、時間をかけてきめ細やかな指導を行



った。

3. 入学前教育の充実

入学前教育として、「ひがドリ」への取り組みを実施してスムーズに大学教育へ進める様に取り組んだ。また、オンラインでの入学前の zoom による懇談も実施した。

4. 資格取得

入学生全員が希望する免許、資格を取得することに全力でサポートを行った。

入学当初は学生全員が免許資格取得の希望があり、授業に対する態度や意欲も見受けられたが、時間とともに方向性に迷いを抱く学生も散見された。学生の想いも尊重しながら迷いに寄り添い、希望に沿った形を模索しながら指導を行った。

5. 地域連携活動の推進

ボランティア活動として、地域の保育所、幼稚園、こども応援広場等々の行事に参加した。

幼稚園においては、実際に子どもたちと触れ合う機会を多く持ち、学生の学びへの興味に深くつながった。

6. キャリア教育の充実

学内における就職説明会において、1年生も参加した。就職の選択肢が多くあることを知り、学生個人の将来像について真剣に考える機会になった。また、複数の施設の方から直接話を聞くことにより、実習に対する意欲や、実習先の選択に興味を持つ機会にもなった。

なお、就職希望者については、ほぼ内定通知を頂いている。

7. 卒業研究発表の充実

今年度は、劇「ともだちほしいなおおかみくん」、楽器演奏「みんな友だち」、ダンス「パプリカ」を一人一人が役割を持ち、全員で取り組んだ。集大成として東大阪大学一号館3階講堂において東大阪大学附属幼稚園の6クラスの園児を迎えて卒業研究発表を行った。園児の素直な反応を直に感じ、卒業研究への取り組みに達成感を感じられる発表会となった。

8. 退学者の減少

来年度から学生募集を停止するため、今年度が最後の入学生となった。退学者防止等については、学生との面談、保護者との連絡等々、教員複数名で対応してきた。しかし、心身の不調、経済的困窮に伴うこともあり、退学を余儀なくされたケースもあった。

9. 3年制学生への支援

3年制コースを導入して2年目となった。入学者は6名であった。前期の履修においては午前の授業を中心とし、後期の履修は午後の授業を中心とした履修指導を行った。1年目はすべて2年制コースの1年生と同じ授業を履修し、実習も（「保育実習Ⅰ」）2月に実施した。3年制コースの学生募集時に謳った「ゆとりをもって勉強」「自分のペースで資格取得」の文言通り、学生達は授業準備に時間をかけることができ、有意義な学生生活を送ることができた。

10. 自己点検・評価

休学者を除いては全員の卒業が認定された。教員が学生一人一人と向き合い、適切な指導を行った成果であると考えている。

しかし、授業料未納のために除籍となった学生については大変残念である。



来年度から学生募集停止となるため、あと2年で学科は閉じることになるが、最後まで学生が希望する職に就けるようにこれまでと同様のサポートときめ細やかな学生指導を行っていきたい。

[3] 介護福祉学科

1. 教育内容の充実と改善

新カリキュラムのもと教育内容の充実と改善を目指す。

(1) 教育内容の充実：国家試験を視野に入れた日々の教育

介護福祉士の資格取得の移行期終了を視野に入れ、日々の授業において国家試験取得につながる内容を体系的に教授する。また、入学当初から国家資格取得を通したキャリアパスを学生に示すことにより、資格取得に向けた学科の雰囲気醸成する。

(2) 教育内容の改善：本学科の学生に合った授業の展開

教育内容は、アクティブラーニングの本格的導入を目指す。生成AIの発展と普及により従来の座学と筆記テストや講義とレポートなどのような受け身の学習だけでは、今後求められる学生の問題解決能力習得にはつながらない。そのため専門教育科目では、専門知識と技術の習得に留まらない、学生の主体的な学習を促す授業を展開する。ICTを利用したマルチメディアによる教育もさらに展開していく。

同時に教員のスキルアップのための学科内の総合研修体制を充実する。学科内の相互研修体制は、併設の国際介護福祉学研究センターの活動とも関連付け実施していく。

2. 学生募集のさらなる強化

高齢化を背景に、介護従事者の必要性は今後増加することはあっても減少することはない。待遇面も年々改善され、製造業や金融業並みの初任給が見込まれるまでになってきている。今年度も、介護福祉士および介護業界の将来性をさらにアピールした学生募集を展開する。

一方、介護従事者に対する社会的なイメージなどは、従来からのマイナスイメージの影響を受けている。介護福祉士を目指す高校生が増えない原因の1つである。

このような状況を変えるための教員による募集活動をさらに強化する。高校訪問及び進学説明会の参加時期を4月開始に前倒しし、早い段階から積極的な学生募集活動を展開する。同時にオープンキャンパスにおける本学科の魅力の発信をさらに強化していく。

3. 学科発信の企画の充実

(1) 地域連携のさらなる強化

社会貢献も大学に求められる使命の1つである。社会貢献の中でも地域とのつながりは、これからの大学に求められる大きな課題である。本年度も、学科の教育の一環として、学科の学生と教員が大学周辺の清掃活動を実施した。さらに近隣の校区福祉委員会と連携し、「模擬デイサービス」を通した貢献活動をさらに進めていく。

(2) 学外向け講座の実施：国家試験対策授業とケアマネジャー資格試験対策講座

2023年度から、学外の介護福祉施設職員を対象とした国家試験対策講座とケアマネジャー資格試験対策講座を企画し、国家試験対策講座を実施することができた。2025年度



も、本学科教員の専門性を生かし、学外向け国家試験対策講座とケアマネジャー資格試験対策講座を実施し、本学科の社会的プレゼンス向上に努めた。

(3) 学内関係者を対象とした介護相談窓口の設置

2023年度から学内関係者を対象とした介護相談窓口を開設した。高齢化に伴い、身近な家族に介護が必要となることは珍しくない。本学科教員は、介護現場での経験も豊富であり、介護に関する悩み事にも専門的に対応することが可能である。本学科教員の専門性を生かし、本学園教職員にとって気軽に相談できる環境を整える。

4. 自己点検・評価

日々の授業において「今日の内容を理解すると国試の〇〇が解けるようになる」と学生に伝え、授業の終了時に内容確認問題を実施するなど、各教員が資格取得に向けた雰囲気醸成に努めた。

本年度は127名の入学者を迎えるということもあり、格段に各教員の負担が増えたため、思うように高校訪問が出来なかった。次年度は入学者も昨年度並みということなので、力を入れたい。

前年度に続き、外部介護施設に出張し国家試験対策講座を実施した。本学教員の専門知識を地域社会に還元する機会となった。

ケアマネジャー試験対策講座は希望者がいなかったため非開講となった。次年度以降は、さらに十分な広報が必要となる。

【大学・短期大学部共通】

[1] 教学支援部

1. 各学科カリキュラム変更への対応

令和6年度より、実践保育学科において3年制が開始され、実践保育学科1年次、2年次は、通常の2年制の学生と3年制の学生が混在しており、実習のカリキュラムが複雑になっている。学科教員と教学支援部で情報を共有し、適切な実習指導を実施した。教職課程の体育科目は「講義」と「実技」に区分して開講した。一部の科目で、授業内容に適合した科目区分への変更を行った。

2. システム変更への対応

GAKUENとUNIVERSAL PASSPORTからなる学務システムのデータベースサーバが稼働しない状況で年度開始となった。このため、当初の予定を前倒しし、新たな学務システムを導入して、後期授業より運用した。旧システムデータを移行して後期授業を開始するにあたり、シラバスの書式が変更となった。旧システムと新システムのシラバスの違いとして、(1)学園訓から導かれる9つの力と科目の対応を示す、(2)科目の到達目標を箇条書きにする、(3)各授業回の事前学習と事後学習を明記する、がある。旧システムからの移行にあたり、まずは(1)(2)をすすめて、(3)は年度末の次年度シラバス執筆時に入力することとした。



3. 自己点検・評価

年間スケジュール、科目担当者決定、時間割決定のプロセスを従来よりも早く進めることを目指し、授業関連データを効率化し再編成したが、科目担当者決定が人事異動の影響を受け、従来と同じく3月半ばの時間割決定となった。仮時間割を決定し、そこからの微修正という形を目指すべきである。また、教務に関する内規、教務留意事項の改定し、履修規程を定めることが急務である。

[2] 学生支援部

1. 退学防止

2026年3月1日時点、前年度2月期と比較して退学者及び除籍者が微増しており、それぞれの学生において事情は異なるものの楽観できる状態ではないといえる。学生支援部担当教員が中心となって、再度退学に関する情報収集と分析を行い、次年度のためのデータとするよう作業を進める必要があると考えられる。また引き続きアセスメントシートの活用を進め次年度に備えなければならない。現状を示すため、2026年3月1日時点での学生移動を下記表1に記載する。

表1

2025年度学生移動数 (2026/3/1 現在)			
学科 (※)	退学	除籍	休学
CS	3	0	2
IC (AS 含)	5	1	2
AF	3	1	0
AC	4	0	1
SC	3	2	0

※「学科」欄の名称

CS：こども学科、 IC：国際教養こども学科、 AS：アジアこども学科

AF：実践食物学科、 AC：実践保育学科、 SC：介護福祉学科

2. 学生生活の安全・安心について

薬物、闇バイト、風俗、SNSによる誹謗中傷などから学生を守るための啓発として、学生支援部担当教員によるオリエンテーション時の講義に加えて、大阪府警察及び布施警察署の担当者による講演を全学科対象に行った。また2026年4月の道路交通法改正に伴う違反行為や自転車の罰金制度の概要について、学生指導部担当教員を通じて学生への周知を行った。

大学周辺で不審者が発見された事案に伴い、キャンパス周辺の見回りを強化した。

学生生活の充実を図るため、今年度は複数のキッチンカーを導入した。学生からは概ね好評だったので、次年度も引き続き検討していきたい。

3. 新入生学外オリエンテーションの活性化

費用負担を抑えたうえで新入生学外オリエンテーションの活性化を図るため、会場を神戸



フルーツフラワーパーク内のホテルフルーツフラワーとした。広さや使い勝手などに問題はなく、次年度以降も本会場を使用する予定。

4. 障がい学生支援の円滑化

障がい学生支援委員会との連携に不備があり、学生支援部としての対応が遅れた案件が生じたので、今後は学生にとって不都合がないよう早期に対応できる状況を整備する必要がある。

5. 学生イベント及び学生会・学友会の活動の充実

今年度は学生会・学友会参加学生を中心に大学祭を企画・開催した。キッチンカーの導入や地元企業の協力もあり、大学祭では近隣地域の方など多くの来場者に恵まれた。ただ企画の取り組み時期が遅かったことが反省点である。次年度は早い段階からの企画立案を進められるよう、学生会・学友会の体制を固めていきたい。

6. クラブ活動・同好会活動の充実

強化クラブが野球部のみとなったことから、全体的なクラブ・同好会活動にも若干の影響が出ているようにみうけられる。今後は学生に自主的な同好会立ち上げなどを促すことで、クラブ・同好会活動のさらなる底上げを図りたい。現在のクラブ及び同好会の状況を下記表2に示す。

表2

クラブ名	顧問	所属人数
ダンス部	渡邊 ルリ	(休部) 0
陸上競技部	松永 須美子	16
バドミントン部	渡邊 由之	5
空手道部	潮谷 光人	1
バスケットボール部	高岡 忍	7
硬式野球部	日比野 功	54
音楽クラブ	高岡 忍	8
国際交流クラブ	山本 緑	9
いちやりばちよーでー沖縄文化研究会	山本 緑	8

同好会名	顧問	所属人数
ドッジボール同好会	二羽 礼	(休部) 0
キッズスポーツ同好会	松永 須美子	3
アウトドア同好会	ドイル中西 千奈都	※(休部) 0

※アウトドア同好会は休部から1年が経過するため、廃部の予定

7. 卒業生のネットワーキング

昨年度同様、大学祭において翔友会、桃愛会に模擬店を出店していただいたが、それ以外の目を引く活動ができていない点が残念である。卒業生に対して、大学祭情報を今まで以上



に早期の段階で提供できるような工夫が求められる。また大学祭以外で卒業生同士が交流できる機会を企画することも考えたい。

8. 自己点検・評価

退学者が微増とはいえ増加してしまった点を重く受け止めたい。これに基づき次年度は各学科の実態に応じた退学防止の対策を講じたい。

[3] 入試広報部

1. 入試広報戦略の検討と目標の実現

達成すべき入学者数目標はCS45名、IC40名、大学編入5名、AF栄養25名、AF製菓25名、SC80名であった。

2. 指定校重視から総合型選抜重視への移行

総合型選抜入試OC参加型では、事前面談を経て出願許可証を発行し、OC参加から出願まで誘導する流れを作ることを意図した。

3. オープンキャンパス(OC)学生スタッフ育成

在学生と話をして情報を得たいというOC参加者は多い。入試広報部が指導した学生スタッフを使うことによって、OC参加者の出願率向上を目指した。

4. 高校生入試活動長期化に対応した事務作業効率化

高校生の進路の検討時期が早くなり、高校1年生のOC参加者も珍しくない。入試活動の長期化は、本学が働きかけるべき高校生の延べ人数の増加を意味する。本学では、出願期間になると、2年生以下の高校生への働きかけが十分に行えなくなるという問題がある。出願から合否発送までの事務手続きの効率化が必須である。

5. 留学生志願者増

留学生の志願者は介護福祉学科と国際教養こども学科に集中しており、他の学科が留学生の志願者を増やすことができれば、充足率を向上させることになる。

6. 入試戦略についての情報共有

募集戦略についての情報共有を進める。入試種別、各月の広報活動の目的と手法について、入試広報部と教員で共有し、高校生に対して一貫性のあるメッセージを発信することを目指す。入試広報部からメール等での発信のみではなく、特に入試方式などは教授会等の場を使って報告することで、全教員へ募集戦略を浸透させる。

7. 自己点検・評価

合格者は、CS34名、IC38名、大学編入1名、AF栄養18名、AF製菓21名、SC87名、定員充足率は92.1%であった。昨年度のCS39名、IC39名、AF栄養24名、AF製菓14名、介護127名、介護福祉学科の定員超過分(40名を)を差し引いた場合の充足率(83.7%)との比較は最低限の合格者を確保したと考えられる。

オープンキャンパス参加者の減少傾向が続いているため、当初の見込み通りの出願者を確保することができなかった。来年度は、オープンキャンパス参加を増やす施策が必要である。

オープンキャンパスの学生スタッフは、年間を通じた研修と目的意識の涵養が必要である。



今年度は、この点が不十分であった。次年度の課題である。

事務作業効率化について次年度に向けた改善策の議論が必須である。入試広報部の事務担当者の業務負担の軽減と効率化を進め行く必要がある。

製菓コースにおいて留学生の合格者が増加した。学科教員の募集活動の成果が表れたと評価できる。

入試戦略における情報共有に関して不十分な点が多かった。しかし、9月以降に入試広報部の体制改革への具体的な方策を記述し、一部は実行に移りつつある。次年度以降、本件のさらなる充実を図っていきたい。

[4] 総務部

1. 補助金の確保

取組内容に該当する項目が多くはなく、補助金を確保するためには取組内容を遂行できるよう全学的に取り組める組織作りが必要と実感している。また、取組項目は一つの部署だけではなく、各部署と連携を図りながら実施しなければならない項目もあるため、補助金獲得に向けた取組み方法を構築する必要がある。

2. 予算の適正管理

大学・短期大学部の財政状況への理解を深め、適正に執行することの重要性を強く認識する必要がある。予算執行にあたっては、合规性・経済性・効率性の観点から各種書類（起案・出張届・購入伺等）を精査し、金額の多寡にかかわらず厳正に行った。

3. 施設設備の年次計画

経年劣化に起因する施設・設備の更新を計画的に進めている。

令和7年度は、消防用設備改修工事（1・2・3・4・9号館）、雑用水加圧ポンプユニット（9号館）、土間陥没修理工事（3号館廻り）、照明設備LED化（3・4号館）を終了した。

令和8年度は、消防用設備改修工事（3・4・9号館）を継続、非常灯用バッテリー（9号館）、固定イス・机及び床材張替改修工事（932講義室）、LEDダウンライト改修工事（832大講義室）、照明器具LED化（外周）、AV機器改修工事（921講義室・922講義室）を新規で計画する。

4. 公的研究費の管理

令和7年度の研修会は、前年度と同様に、コンプライアンス教育について「説明動画の視聴」及び「説明資料の確認」により「公的研究費に係るコンプライアンス教育」、「研究倫理教育研修会理解度アンケートについて」及び「公的研究費の使用にあたっての確認（誓約書）」を提出する形式で実施した。

5. 教育懇談会の開催

大学・短大主催の懇談会を設け、子女の学生生活（学業成績・課外活動・就職等）に係る情報交換・相談を実施する。大学・短大情報を保護者に発信し、各種行事への参加を仰ぎ、より一層の連携強化を図った。

6. 後援会新旧役員会の開催

各学年の保護者役員に参加いただき、前年度収支決算書、今年度収支予算書を審議、次年



度の新役員候補の互選を行った。また、子女の卒業に伴い、任期満了となる保護者役員の方へ感謝状、記念品の贈呈を行った。

7. 自己点検・評価

令和8年度における施設設備の年次計画であった固定イス・机及び床材張替改修工事(832大講義室・935講義室)、AV機器改修等(8号館814・815・862)は令和9年度以降に実施することで見送ることとした。

令和8年度より東大阪大学短期大学部実践保育学科の入学生の募集停止が決定された。東大阪大学、東大阪大学短期大学部実践食物学科及び介護福祉学科においては引き続き、入学者の募集強化・改組等において定員充足に注力する必要がある。

[5] 図書館

図書館2024年度に1階閲覧室が前期週3日の午後の開館、後期は閉館して授業での使用のみ可となり、2025年度は完全に閉館して授業のみの使用となった。

これに伴い、2025年3月に閲覧・貸出の多い1階の絵本・紙芝居・児童書・学生選書及びアンデルセンコレクションを2階へ移動させ、一方2階の閲覧机を一部1階に移した。

2025年度の入館者数(2025年4月～2026年2月)は、教職員を含め1304人、延べ貸出し冊数は704冊。ここ三年間の入館者数、貸出数の推移は以下の通りである。

	入館者数	貸出数
2023	1,957	1,013
2024	1,706	774
2025	1,304	704

1. 教育・研究に役立つ資料の収集と提供

(1) より良い教育と研究環境の構築を目標に、収書方針に従い、2025年度も引き続き「辞書・事典参考図書」を購入した。2025年度末までの「辞書・事典類」冊数は昨年度より7冊増の2,809冊(2026年3月31日までの登録冊数)となっている。「アンデルセン絵本コレクション」は、合計35ヵ国・地域、25言語数の416冊である。

(2) 2025年度(2025年12月31日までの集計)までの蔵書数は以下の通りである(前年度までの数字を括弧内に表示)。

和書 81,247冊(80,594) 洋書 6,918冊(6,897)

雑誌 継続受入誌10誌/所蔵621誌(621)(増減なし)

AV資料 3,774点(3,771)

厳しい財務状況のなか、雑誌以外いずれも増加している。和・洋書の合計は、現在88,000冊を超えている。

2. 図書館各種企画事業

2025年度も学生の図書館利用を促進し、教育活動を支援する目的で、各種企画を下記の通り実施した。



(1) 展示コーナーの充実

7年前から、2階に学科の特色を示す展示コーナーを設置し、展示内容の充実をはかってきた。2025年度の展示テーマは前期が「世界の食」で、アジアからヨーロッパにかけての料理と食材に関する書籍を展示した。後期は「健康（心と身体）」で、健康に留意したライフスタイルからアスリートのための栄養バランスや休養などに涉る書籍を展示した。また、アンデルセンコレクションの展示を2階展示室に移している。

(2) 図書館通信「螢窓」

2025年度は、4月号（春号）・10月号（秋号）を発行した。教員の読書をめぐる思いを伝える「研究室訪問」「本、あれこれ」を継続しているほか、「学生選書ツアー」紹介、「教員推薦図書」の欄を設けて学生に教員の研究成果（出版物）及び図書館の新着図書を紹介している。

(3) 学生選書

2025年度は、「学生選書」を春（6月）と秋（11月）に二回実施した。学生が図書館に置いてほしい、或いは卒業論文執筆用の文献などを160冊選んだ。参加した学生は計25名（選書ツアー10名・Web選書15名）である。選ばれた図書は整備を経て、図書館1階の学生選書の専用書架に配架されている。

(4) 読書コンクール

2025年度の読書コンクールへのエントリーは大学3年次生2名のみであったため、来年度コンクールの審査対象となった。

3. 急を要する配慮事項

セキュリティ装置の導入

2024年度・2025年度蔵書点検の結果、不明本は見いだされなかったが、今後、懸案の地域社会貢献の一環としての外部開放計画を推進していくならば、セキュリティ装置の導入が急務である。

4. 自己点検・評価

- (1) 2025年度は、当初から1階を閉館せざるを得なかったことが、学生に学びと成長の機会を提供することを困難にした。2025年度は絵本・紙芝居を2階に移動させたが、授業による閲覧・貸出は減少している。授業も図書館利用を促すきっかけであるが、学生が自ら図書館を訪れ、書籍を読み、実習や卒業研究に必要な文献資料を選ぶ確保できるよう尽力する。
- (2) 次年度も展示コーナーの内容をより充実すると共に、各種企画事業をより推進し、よりよい図書館サービスを全教職員及び学生に提供したい。

[6] キャリアサポートセンター

1. 就職・進学に関する指導や相談

(1) 新年度ガイダンスの実施

4月のオリエンテーション及び授業において、卒業年度の学年に向けてキャリアサポ



ートセンターのガイダンスを実施した。新入生においては、大学の就職支援サイト「就活ナビ」（株式会社ディスコ提供「キャリアタスUC」）の初期登録・志望先登録を済ませ、全学の学生が利用できる状態にした。

(2) 日常的な指導・相談

学生の要望に応じて面談を行い、就職活動に関する書類（履歴書、エントリーシート、推薦書等）の作成支援や面接指導、進路相談を実施した。

2. 就職活動の支援と状況把握

(1) 「就活ナビ」を用いた就職活動支援の日常化

例年通り、学生の就職活動を支援するため、「就活ナビ」上での求人票閲覧や相談予約、活動報告・進路決定届の提出、ガイダンス情報の閲覧・予約などを行った。

(2) 学科の教員との連携、教授会での情報共有

「就活ナビ」への即時入力ができない学生向けに、教員からの情報提供をもとに学生の就職活動・内定状況の把握を進めた。毎月の教授会にて全学生の内定状況を共有し、支援を呼びかけた。

3. 就職支援に関する講座等の実施

(1) 学内合同就職説明会の実施

今年度は、6月30日（月）と10月27日（月）の2回、学内合同就職説明会を実施した。今年度は、保育・福祉に携わる法人と企業をそれぞれ9号館と8号館に分けて実施した。両日併せて、保育・福祉に携わる法人は44、企業は37の参加であった。学生は約80名の参加であった。短大1・2年次及び大学3・4年次の学生は採用情報、大学1・2年次はアルバイト募集について聞きあった。法人・企業へのアンケートでは、学生の姿勢に対する好評価が目立った。

(2) 授業等を通じた就職対策講座の実施

大学では、2年次必修科目「キャリアを考えるⅡ」を通して、リクルートとマイナビの担当者による低学年向けの就職準備講座を計2回実施した。また、3年次選択科目「キャリア形成とインターンシップⅠa・b」「キャリア形成論」にて、リクルート、マイナビを招き、就職対策講座を実施した。また、こども学部及び実践食物学科において「就活スタートアップセミナー」を開催し、面接対策講座や模擬面接などに重点をおいて指導した。留学生向けにはTOEICやBJTの受験支援や対策講座を実施した。

短大では、1年次科目「大学で学ぶ」や2年次科目「社会人になるには」において、履歴書・自己PR・志望動機の指導、卒業生や専門家の話を聴いたうえでライフプランを具体化する学習などが行われた。

4. キャリア教育の推進／インターンシップ支援

(1) キャリア形成に関する講座の実施

例年のように、センター所属教員を中心に各学科の実情・要望に応じて、インターンシップへの橋渡し、専門職として働くことや生きることに通ずる講座・講義が実施された。特に、大学においては、学外講師（無償）を積極的に招き、例えば、こども学科2年次必修科目「キャリアを考える」では、リクルートキャリア、マイナビ、東大阪市立障



害児者支援センター、NPO 法人さをりひろば、自衛隊などの学外講師からキャリア構想に通ずる講義を受けた。

(2) インターンシップ支援の促進

インターンシップ支援に関しては、大学コンソーシアム大阪、東大阪商工会議所、東大阪市役所（就活ファクトリー）、私立幼稚園及び民間企業との連携体制を確保し、担当教員とも協力しながらインターンシップ支援を継続している。

5. 就職先の開拓・拡充／教職員による研修等の参加／センターとしての事業開拓

学生の就職先を開拓・拡充するため、大学推薦制度の導入や東大阪市の就活ファクトリーとの連携強化、学内の国際交流センターとの情報交換も密にした。例年通り、職員による各種就職フェアへの参加、大阪私立短期大学協会就職問題研究会の役員会及び研修会、情報交換会などへの出席も行った。今年度も、3月1日（日）にインテックス大阪にて開催された「マイナビ就活エキスポ」に大学相談ブースを開設し、現地での学生支援も行った（学生の予約・参加者数は3名であった）。

本年度も月1回昼休みに「学内ミニガイダンス」を開催した（実施月は4・5・7・11・12・1月）。参加企業・園・法人は116事業所、学生の参加者数は延べ170名であった。ミニガイダンスから内定に結びついた学生もおり、参加団体にも好評であった。また、ミニガイダンスとは別に、大阪市教育委員会、豊中市教育委員会、防衛省による小規模説明会、留学生に特化した就職説明会なども実施することができた。

6. 自己点検・評価

- (1) 学生の来室が増え、就職・進学に関する状況把握や指導・相談のしやすさへとつながった。
- (2) 「就活ナビ」から進路希望届や内定報告を行うことが定着した。入力しない学生への支援・指導については、個別支援や学科との連携のもとで3月までには把握できるようになった。
- (3) 就職支援に関する講座等の開催は、各学科との連携のもと充実した。公務員試験の結果としては、教員採用試験合格者が大学で4名（小学校教諭）、短大で2名（中学校家庭科教諭）、自衛官合格者が大学で1名あった。
- (4) キャリア教育の推進／インターンシップ支援については、それらに特化したカリキュラムにおいて、高等教育に必要な知識・体験・活動への橋渡しを行っている。授業との連携は例年になく活発に行われた。
- (5) 就職先の開拓・拡充／教職員による研修等の参加については、限られた人員ではあるが、可能な限り行った。今後、企業の就職先の拡充に向けて、引き続き、具体策を講じて取り組む。



[7] 基盤教育研究センター

I. 成果と課題

1. 初年次教育として関連授業や講座の実施

昨年同様、入学予定者には「入学前教育」として各学科が用意した学習内容を入学前に取り組むようにした（下記3（1）を参照）。初年次教育としては、大学及び短期大学部1年次科目の「大学で学ぶⅠ・Ⅱ」を通じて、レポート作成の技術、ラーニング・スキル（学び方の技術）、メールの送り方、社会問題への言及など、大学生としての教養を磨くための学習が展開された。

2. 「就職に直結する学力」と関わる授業の実施

大学及び短期大学部2年生は、それぞれ「キャリアを考えるⅠ・Ⅱ」や「社会人になるにはⅠ・Ⅱ」を通じて、就職意識の涵養と、働くこと・生きることを結びつける学習活動を実施した。

また、介護福祉学科では介護福祉士国家試験対策講座、実践食物学科では栄養士実力認定試験対策講座、国際教養こども学科ではTOEICやBJTなどの受験支援・対策講座を活発化してきた。こども学部では3・4年次科目「キャリア形成とインターンシップⅠa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb」を通して、就職に直結する基礎学力の向上が図られた。

3. リメディアル教育として次の学習活動を計画・実施

(1) 全学科の入学予定者を対象とした入学前教育の実施について

すべての学科において、学科の特性を生かした課題を入学生に提示し、取り組んだ。

「ひがドリ」（基本）をはじめ、学科独自の課題を準備し、入学前後で切れ目のない学習の実現を図った。入学生に対する聴きとり調査からは、その意義も提出された。

(2) 「ひがドリ」（ラインズドリル）を用いた、国語や数学又はSPIの学習継続について

就職採用試験時に基礎学力を問う問題が課される職やSPIが課される職に就こうとする学生は「ひがドリ」のSPIを活用した。また、大学・短期大学部いずれにおいても、基礎学力判定テストを平均年1～2回（学科による）実施し、学力の推移を把握したうえで学生指導に役立てた。

(3) 各学科・各部署と連携した学生の学習状況・学習課題・学習要求の把握について

今年度も、各学科における学生の学習全般に関する意見交流を継続的に行ってきた。今年度は実践食物学科の代表学生（2年次生）2名に聴きとり調査を行い、基盤教育に関する事業の是非を問うことも行った。その声をもとに、事業の改善を行うことができていく。

入学前教育に関して入試広報部、情報教育推進委員会ともに連携し、入学予定者への郵送物の送付、「ひがドリ」「学びの泉」のアカウント付与を行うことができた。新たに今年度より、各学科から入学生に郵送したプリント等についても本センターで保管・管理を行い、入学生本人や高等学校等からの問い合わせにも対応できる体制を整えた。



4. 日常的な実践・研究を通じた具体的かつ意味のある教育方法の調査と提案

ここ数年、「就職に直結する基礎学力」（自己理解に基づき自己表現ができ、他者から寄せられる要望にどう応えるかと考えらえる能力）の向上に向けた具体策を講じてきた。外部人材・無料講座の活用も積極的に考慮し、自衛隊や地元企業、また、社会福祉法人や障がい児者の自立支援事業に従事する団体など、発達援助に関する職種の方々からの講義が充実しつつある。

II. 自己点検・評価

1. 初年次教育に関しては、入学前と1年次の2年間として把握し、入学前後の学習内容の充実を検討することとした。
2. リメディアル教育に関しては、「ひがドリ」の方法論、他の学習ツールの可能性を探りつつ実践することとした。
3. 入学前教育に関して、前年度までと比べ第1期の合格発表の日時が早期化されたことから、配布物の確認を行う時間が十分に確保できなかった。各学科で作成・印刷される配布物については、センター（長）で郵送前に確認し、ファイルに保管することとした。
4. 「就職に直結する基礎学力」の向上に向けた授業実践・研究を重ね、関連部署であるキャリアサポートセンターとの連携をさらに強めることとした。

[8] 保健センター

保健センターでは、「保健室」と「学生相談室」を設け、常時連携しながら「こころ」と「からだ」の両面から支援する体制で、①健康診断の実施とその結果に基づく健康管理・健康増進支援、②心身の健康相談・支援、③安全衛生諸活動などを実施した。基本的な感染症対策を続けながら、新型コロナウイルス、インフルエンザ、マイコプラズマ肺炎ほか様々な感染症に対応した。保健室および学生相談室の活用について、多くの学生・教職員に周知を図るよう努めた。そして、保健センターの各種業務状況は、定例の教授会で逐次報告した。

1. 感染症対応

文部科学省・厚生労働省の基本方針に則り、学生支援部と連携しながら本学に適切な方法で取り組んだ。具体的には、適切な換気の確保、手洗い等の手指衛生や咳エチケット等、教育研究活動に支障を生じさせることなく両立が可能な対策について継続して実施した。

- (1) 毎日、学生・教職員及び学内各部署からの発熱者や体調不良者の報告を受け対応した後、学長、副学長、事務局長、学生支援部長、及び各学科長に報告した。留学生の情報は、国際交流センターとも共有した。
- (2) 学内で使用する手指衛生に必要なエタノールは保健室で準備した。

2. 健康診断

学生は、オリエンテーション期間である4月4日と4月7日の2日間、教職員は6月4日と6月5日の2日間、法令に基づく定期健康診断を実施した。学生健康診断の受診率は99%、教職員の受診率は98%であった。健康診断実施中は、保健センター以外の大学教職員にもご協力を頂き安全に速やかに誘導をおこなった。また、健診実施に関する問題点を明確にし、



健診業者との綿密な協議を重ね、実施・事後措置の充実を図った。定期健康診断後、有所見者には問診・再検査・精密検査・生活指導等をおこない、健康に対する自己管理を支援した。

3. 外傷・疾病・健康相談への対応

保健室では学生・教職員に医療機関へ行くまでの応急処置をおこなった。また、保健室及び学生相談室の両方において、さまざまな疾病についての相談（メンタルヘルスを含む）を実施した。保健室は、月曜日～金曜日の9:15～17:30に開室した。学生相談室は、水曜日の12:00～16:00、さらに10月からは、ひとつきに1～2回、月曜日の12:00～16:00に開室した。その他、村上学園フェスタなど、学園の行事において保健室を開室し救護待機の対応をおこなった。保健室及び学生相談室の月別利用者数を、表1と表2に示した。

保健室

表1 保健室

(令和8年03月31日現在)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学生本人から	実人数	26	40	34	42	17	19	28	22	24	17	7	2
	延べ回数	46	59	37	53	19	25	44	38	30	27	14	4
学生本人について 教職員から	実人数	4	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	延べ回数	5	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
保護者から	実人数	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
	延べ回数	1	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0

学生相談室

表2 学生相談室

(令和8年03月31日現在)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学生本人から	実人数	1	1	2	2	閉室	閉室	2	3	3	2	6	閉室
	延べ回数	2	8	6	5			5	4	5	6	7	
学生本人について 教職員から	実人数	5	1	4	5	閉室	閉室	2	1	2	3	2	閉室
	延べ回数	6	2	6	5			3	2	2	3	2	
保護者から	実人数	0	0	0	0	閉室	閉室	0	0	0	0	0	閉室
	延べ回数	0	0	0	0			0	0	0	0	0	

4. 保護者面談

学生の心身の健康管理・維持・増進のための様々な支援をおこなうには、保護者からの情報提供も大切である。入学式当日に新入生保護者面談をおこない、学生の心身の健康に関する相談を受けた。学生の情報（疾病、障がい、アレルギーなど）については、学生本人及び保護者の同意を得て担当部署の教職員、校医などと共有し、入学後の学生生活支援に活用した。また、保護者からの問い合わせについて丁寧に対応した。

5. 啓発活動

食事・運動・感染症・喫煙・飲酒・薬物に関する健康教育は、保健センター員が、所属学科や授業担当科目の中で適宜実施し、保健センター会議で共有した。学生が、保健室や学生相談室の場所を知り、気軽に来室できるように、「サインスタンプラリー」を取り入れた。サインスタンプラリーとは、学生が保健室や学生相談室を訪れて看護師・カウンセラーに直接会い、お話しをして、サイン・スタンプを受け取る小さなイベントである。このサインスタンプラリーにより、複数の学生が「気軽に話しを聞いてもらえると感じた。」とアンケートに記述した。また、令和7年度大阪府健康キャンパス・プロジェクト「やせ・肥満モデル



事業」のモデル実施校に選定された。このプロジェクトは、実施日時・対象人数・実施場所等に制限があり、他部署とも検討を重ね、大阪府健康医療部および栄養士会職員とともに、本学で実施した。学生は、体組成計で「Body Mass Index (BMI)・筋肉量・骨量」を測定し、管理栄養士から適切な指導を受けることにより、自身の健康について考え、生活習慣の改善につなげられるように話し合った。

6. 進路支援

学生生活に不安を抱えている学生や配慮の必要な学生等、障がいがあると考えられる学生のために、障がい者枠の就職情報等の各種情報提供書類を集めて整理した。

7. 自己点検・評価

- (1) 学生・教職員の健康診断を高い受診率で実施できた。来年度は、100%を目標に受診案内を続ける。
- (2) 基本的な感染症対策をおこない、教育研究活動に支障を生じさせることがない状態を継続できた。来年度は、授業教室内の照度および二酸化炭素濃度と室温の関係を精査し、より快適な授業環境の確保をおこなう。
- (3) 昨年度からスタートした「サインスタンプラリー」は、学生相談室を知らない学生や、訪問したくない苦手な場所であると思っている学生に有効であった。来年度は、より学生が来室しやすいように、内容を見直している。
- (4) 令和7年度大阪府健康キャンパス・プロジェクト「やせ・肥満モデル事業」は、来年度（令和8年度）「大学でのフレイル予防の取組み」へと進んでいる。引き続き大阪府健康医療部および医師・管理栄養士等の専門職と情報交換しながら、本学学生への授業を計画している。

[9] こども研究センター

1. 「こども広場」

平日 月曜日～金曜日 午前9:30-11:30 午後13:00-15:00 予約制 定員：親子20組

○「こども広場」利用者一覧表



○毎月の制作内容

実施日	内容	組数	こども数
4/14～17	足形アートでこいのぼり	35	38
5/19～22	ヒンメリ	30	31
6/16～19	牛乳パックで作るオリジナル和紙	41	45
7/22～25	簡単ミニアルバム	25	34
8/19～22	サンキャッチャー	30	35
9/16～19	フラワーランタン	34	37
10/6～9	ハロウィンやじろべえ	34	37
11/17～20	毛糸のクリスマスリース	45	50
12/15～18	お正月の絵馬飾り	47	51
1/19～22	お絵かきパット	44	46
2/16～19	簡単かわいいうさぎびな	41	45
3/9～12	絵本カバーで手さげ Bag		
計		406	449

2. 「親子で遊ぼう」 土曜日（月1回）

父親や祖父母、兄弟が参加しやすく家族そろっての参加が多い。また、平日のこども広場は来られない方や、以前こども広場を利用されており、今は保育所や幼稚園・小学校に行っている方などの参加もあり、地域に定着してきたことを感じる。

月	内容	組数	こども数
4	絵の具遊び（ビー玉転がし）こいのぼり作り	13	19
5	親子ヨガ（川端由佳先生）	7	8
6	釘で遊ぼう（若井産業）	13	20
8	水遊び・造形遊びをしよう	11	15
9	新聞紙で遊ぼう	10	15
10	英語で遊ぼう（弓削カリン先生）	15	21
12	大学祭（こども広場で遊ぼう）	47	63
1	お正月あそび	14	23
2	歯みがき好きになろう（歯科衛生士：赤松智香子先生） ～口と身体のつながりの話・ごしごしくんの工作～	14	18
3	人形劇観劇会（人形劇団クラルテ）		
計		144	202

3. 「こども応援ひろば」

(1) こども応援ひろば 2025 パート I

こども学科の学生との共催で、「コシカ万博」をテーマに、学生がSDGsを意識したゲーム・ダンス等の遊びのブースを担当した。

こども研究センターでは、自由に写真撮影ができるフォトブースを設置すると共に、



小さな子どもが休憩できるスペースとして、赤ちゃんも遊べるおもちゃなどを用意した。また、例年、乳児が楽しめる遊びが少ないという声があったので、滑り台やトンネル、ボールプールなど、赤ちゃんでも身体を動かして楽しめる赤ちゃんコーナーを設置し、学生が子どもとかかわれるようにした。

(2) こども応援ひろば 2025 パートⅡ

2022年度に公演して頂いて以来、3年ぶりに「ピアノカの魔術師」の皆さまをお迎えし、公演会を実施した。「また呼んでほしい」という声が多くあり、当日も大人・子ども合わせて250名近くの参加があった。「ピアノカの魔術師」のSNSでも宣伝していただいた効果もあり、大人だけで参加された方も多くおられた。当日は、赤ちゃんから大人まで大盛り上がるの公演となった。

日時	内容	組数	こども数
7/12 (土) 10:00~13:00	こども応援ひろば 2025 パートⅠ 「みんなで作ろう『こどもまんなかひろば』」	109	176
11/30 (日) 10:40~12:00	こども応援ひろば 2025 パートⅡ 「ピアノカの魔術師」公演会	85	116

4. 自己点検・評価

「こども広場」は、昨年から利用料を無料にしたことで、コロナ禍以前の利用人数に戻つつある。しかし、子どもの年齢層が大きく変わり、0,1歳の利用が増え、3歳以上の利用が大幅に減っている。低年齢化の理由としては、保育園の1歳児入園や、幼稚園（こども園）のプレ保育や満3歳入園を希望する方が多くなっている事が考えられる。0,1歳児の親子が楽しめるように毎月の「赤ちゃんタイム」と、保育士によるベビーマッサージを継続していくとともに、遊びの環境づくりやおもちゃ遊具等の教材選びなども、日々振り返りを行い、発展させていきたい。

情報発信においては、Instagramにて毎週末にこども広場の様子やイベント案内などを発信している。また、こども広場の利用予約が定員に達した時や、臨時の休館等の情報も随時発信することで、利用者に情報がすぐに届き、より利用しやすくなっていると感じる。

「親子で遊ぼう」は、時期や内容によって参加人数のばらつきはあるが、「家ではできない遊びが楽しめた」などの感想を頂き、家族で楽しめる場として効果が高いと感じる。また、今年度はこども学科学生と地元企業との連携の一環として「親子で遊ぼう」でワークショップを行った。学生が地域の親子にかかわる機会ができ、とても良かった。今後も、参加したいと思えるような魅力的な内容を企画していきたい。

「こども応援ひろば」については、こども広場の利用者だけでなく近隣の幼稚園・保育園・公共施設へのチラシ配架によって知って下さった方の参加もあり、多くの方に楽しんで頂く事ができた。中には市外からHPを見てきて下さった方もいる。続けて参加して下さる方も毎年新鮮に楽しめるよう、今後も内容の工夫をしていきたい。

情報発信の手段として、HPやSNSを活用しているが、中には「正門前の掲示板を見て来ました」「保健センターや福祉事務所で聞きました」「友だちに誘われて」など、デジタルでの



情報発信だけでなく、地域の口コミでの広がりも多く感じる。掲示板の飾りを季節ごとに換え、イベント案内を掲示するなど、より見てもらえるような掲示板作りにも努めている。

今後も地域の親子が集う拠点としての役割を意識し、より安心して集い楽しむことができる運営のあり方を考えていきたい。

<p>5月の制作 足形アートでこのぼり</p>	<p>6月親子で遊ぼう「釘で遊ぼう(若井産業さま)」</p>
	
<p>赤ちゃんタイム(8月ベビーフォト)</p>	<p>季節の行事(10月ハロウィン)</p>
	
<p>子ども応援ひろば 2025 パートI</p>	
	
<p>子ども応援ひろば 2025 パートII「ピアノカの魔術師公演会」</p>	
	

[10] 異文化交流室

1. チューター制度

異文化交流室では、チューター学生の活動を組織化し支援している。チューター活動は、留学生と日本人学生がともに充実した学校生活を送り、様々なイベントを企画・実施する中で、異文化に対する理解を深め、自己成長を遂げることを目的としている。

令和6年度は4月に大学・短期大学にチューター公募をして各学科から選出して5名のチューターによる活動を始めた。本年度は留学生との日本文化を中心とした交流会を学生同士の授業の空いている時間内で定期的に行った。前期にはチューター主催イベントとして、七夕のイベントと飾り付けを学内の学生用スペースで行った。



開催日：2025年7月2日（水）～7日（月）、場 所：8号館1階学生ラウンジ

2. 留学生、学生、卒業留学生、卒業生、チューター、教員参加の交流会

第4回異文化交流フットサルワールドカップ大会を開催した。敬愛高校の職員、付属幼稚園の父兄を含め8チーム合計64名以上が参加した。



開催日：2025年12月7日（日）、場 所：東大阪大学敬愛高校フットサルコート

3. 地域の学生との交流促進・各種語学関連のスピーチコンテストの支援

第9回東大阪大学弁論大会を開催（本学学生と留学生・地域の学生が参加）

本年度は参加者9名（本学2名、大阪ニューポイント日本語学校7名）

弁論部門は自作原稿、朗読部門は課題文制で募集を行った。

受賞結果

- 第一位：日本語弁論「日本で難しいこと」
大阪ニューポイント日本語学校進学2年コース2年 ライ・ビバス
- 第二位：日本語弁論「日本の好きなところ」
大阪ニューポイント日本語学校進学2年コース1年 タマン・フルパ
- 第三位：日本語弁論「日本のお祭りー花火」
大阪ニューポイント日本語学校進学2年コース1年 スレスタ・ロニト
- 努力賞：日本語弁論「朝のたたかい」
大阪ニューポイント日本語学校進学2年コース2年 ネウパネ・ビノド
- 努力賞：日本語弁論「日本に来てからの経験」
大阪ニューポイント日本語学校進学2年コース1年
チョードリー・プラティクサ
- 努力賞：日本語弁論「ファンとして」
東大阪大学こども学部国際教養こども学科3年 張芸笛



開催日：2025年11月15日（日）、場 所：8号館832教室

4. 第7回国際交流料理大会

テーマ「世界の麺料理」に沿ってレシピ考案から調理までを行い、見た目や味を競った。本年度は柏原高等学校や大阪ニューポイント日本語学校からの参加があり、8チームで実施した。



開催日：2025年12月21日（日）9:30-14:00 場 所：814教室

5. 国際交流センター共催クリスマスパーティ

留学生交流のためのクリスマスパーティを開催しランチとともにゲーム、歌やダンスを楽しんだ。



開催日：2025年12月17日（水）12:00-13:00 場所：国際交流センター

6. 自己点検・評価

本年度は、本学の学生および留学生の学業を支えるチューター活動を継続・充実させるとともに、より活発な交流の機会を創出する。あわせて、各学科の特色を生かした企画を通して異文化交流室の活動を発展させていく。

さらに、国内外の学生との連携を広げ、言語や社会について共に考える場を交流室で企画・実施し、多様な参加者が集う地域貢献型の取り組みを推進する。

[11] 産官学地域連携室

1. 東大阪市連携6大学公開講座

2026年2月19日（木）に「東大阪市男女共同参画センター・イコーラムにおいて東大阪市教育委員会主催の「第14回 東大阪市連携6大学公開講座」が開催され、布本肇こども学科准教授が「子どもたちから学んだ特別支援教育」をテーマに講演実施。

2. 高大連携事業

年間を通して、東大阪大学・東大阪大学短期大学部の教員が、東大阪大学敬愛高等学校、東大阪大学柏原高等学校において高大連携授業を実施した。

3. 自己点検・評価

東大阪市との連携事業が公民連携協働室を通して情報共有がスムーズに行えるようになったことから、大学の特色を活かした地域発展のために貢献できる取り組みを実施した。



[12] 公開講座

1. 令和7年度公開講座

社会貢献の取り組みとして公開講座を計画・提案し、大学・短期大学の学科より10講座を設定。地域連携として一般の方々による参加の募集を行った。

内訳

■参加者数：16名

国際教養 こども学科	2025年7月13日（日）14時～15時30分	山本 緑	准教授
タイトル	なぞとき世界旅行― 留学生の国のなぞを解きながら、多言語・多文化を体験しようー		
内 容	本学留学生や地域に住む外国人の方との交流を通じて、なぞときを楽しみながら多言語・多文化を体験する		

■参加者数：7名

実践食物学科	2025年8月2日（土）10時～12時	松井 欣也	教授
タイトル	昆虫食～虫ってどんな味？～		
内 容	食用昆虫の必要性について確認し、食用昆虫を使った料理やお菓子の試食を体験した。		

■参加者数：7名

実践食物学科	2025年9月6日（土）10時～12時	松井 欣也	教授
タイトル	災害時の備え～被災地の現場から考える～		
内 容	災害時の「心構え」や「予備知識」があれば、少しでも減災することができる。災害時に役立つ「パッキング」を一緒に作成した。		

■参加者数：1名

こども学科	2025年9月20日（土）11時～12時	ドイル中西 千奈都	講師
タイトル	服のチカラプロジェクト2025		
内 容	UNIQLOやGUなどを展開するファーストリテイリングがUNHCR（国際難民高等弁務館事務所）とともに取り組むプロジェクトを説明し参加してもらった。		



■参加者数：6名

実践保育学科	2025年10月5日（日）10時30分～12時	松永須美子	教授
タイトル	スポーツ吹矢～尿漏れ予防もできる～		
内容	複式呼吸を使って矢を吹くスポーツ吹矢を体験。希望者には骨盤底筋の動きを超音波で確認してもらった。		

■参加者数：16名

実践保育学科	2025年10月5日（日）13時30分～15時	篠原 理恵	教授
タイトル	ピアノとおはなしコンサート Part4～モーツァルトの音楽と人生～		
内容	モーツァルトの歩んだ人生と曲の数々をおはなしとピアノ演奏で紹介した。		

■参加者数：20名

実践食物学科	2025年11月9日（日）10時～12時	木下 哲郎	准教授
タイトル	洋梨で彩る本格的タルトづくり		
内容	洋梨とアーモンドクリームが織りなす本格的な味わいのタルト作りを体験してもらった。		

■参加者数：10名

実践食物学科	2025年12月14日（日）10時～12時	松田 依果	准教授
タイトル	ミニチュアフードを作ろう！		
内容	樹脂粘土を使って、本物そっくりの食品を作ってみるワークショップでクリスマスディナーの料理作りを体験してもらった。		

■参加者数：7名

こども学科	2025年12月20日（日）14時30分～16時	矢島 彰	教授
タイトル	3Dプリンターで遊ぼう		
内容	3Dプリンターを使って身近なものを制作したり、3Dプリンターに触れるなど楽しい講座を開催した。		

■参加者数：3名

介護福祉学科	2026年1月17日（土）10時～11時30分	伊藤美加子	教授
タイトル	認知症サポーター養成講座		
内容	認知症を正しく理解し、偏見を持たず、認知症の人や家族に応援者として気遣いをする在り方について理解を深めた。		



2. 自己点検・評価

公開講座は、学校近辺に住まわれている方々が例年お目当ての講座（ケーキ作り）を事前に電話問い合わせでももらっしやる傾向があり、その点で一定の受講者数は保障されている。なお例年通り、市役所やリージョンセンター等への配架も行ったが、各所20枚程度の上限により、効果のほどは定かではない。その上で前年度同様にHPやX、各学科のご協力のもとインスタでも広報を行い、チラシ印刷のコストを大幅に削減。周知方法変更に大きな混乱は起きていないものと思われる。

前年度同様に申し込みはネットもしくは電話による申し込みとしたが、事務処理上はスムーズな受け入れ態勢が整った。その一方で人気のある講座への申し込みが集中し、一回の申し込み人数に制限を設けても受付開始数分で定員に達してしまい、申し込めない等のご意見がアンケートに記載されていた。次年度以降は先着順ではなく抽選等の対応も検討の必要があるが、その場合には当選者への案内方法によって事務作業量が増える懸念が残る。

今後も、本学の各学科を十分に活かした魅力ある内容で地域の皆様に参加を頂き、学び共感いただく機会を継続することで、本学認知への広報としても強化していきたい。

[13] FD・SD委員会

令和7年度は、教職員の資質向上を目的とし、以下の研修会を実施した。

1. 第1回FD・SD研修会

講演：「自分らしくいられるための言葉がけ（ペップトーク）」

講師：岡崎 茂美 客員教授

日時：2月19日（木）10:00～11:45

場所：8号館3階832教室

内容：ペップトークの考え方と実践を共有し、大学全体で学生を支える言葉の文化を育む第一歩とすることをねらいとして開催。

出席者：教員20名 職員17名

アンケート提出者：教員15名 職員13名

2. 第2回FD・SD研修会

講演：「脳のパフォーマンスアップ～可能性は無限大～」

講師：呉 真由美 客員教授

日時：3月19日（木）13:00～14:45

場所：8号館3階832教室

内容：速読を活かした脳のパフォーマンスアップの講話と実際に速読トレーニング、眼筋トレーニング、毛様体筋トレーニングを実施しての脳のパフォーマンスアップを試みる。

出席者：教員23名 職員12名

アンケート提出者：教員16名 職員5名



3. 自己点検・評価

本年度は事業計画のうち「6. 職員の資質向上」のみの開催となった。次年度は「授業方法についての研究会」「配慮の必要な学生への対応」、「留学生の教育・指導」など優先順位の高いものから実施していく。

[14] 国際介護福祉学研究センター

1. 論文誌の発行

東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センターにおける逐次刊行物として論文誌「多文化と介護」を創刊した。本論文誌の発行が、2025年度本センターの中心的な事業であった。

2. 介護福祉学ランチョンセミナー実施

2024年度に引き続き、ランチョンセミナーを実施した。週1回、昼休みの時間を利用し、センター員が中心となって、研究発表などを行った。又、昨年度同様、参加は誰でも可能とし、他学科との交流も活発に行った。

3. 介護福祉学科との公開講座共同開催

昨年度に引き続き、本学の公開講座として介護福祉学科において、認知症サポーター養成講座を開いた。

4. 村上学園介護相談室の設置

村上学園教職員限定ではあるが、介護相談室を開設した。周知の問題もあり、相談件数は0件であった。

5. 自己点検・評価

定期刊行物を創刊することによって、本センターの研究成果を広く内外へ発信することが可能となった。事業計画では、地域の介護福祉施設に対しても広く投稿を募り、学術的な情報発信に加え、介護実践の取り組みの内外への発信のハブとなることを目指し、施設職員からの投稿を得た。

ランチョンセミナーの実施も5年目に入り、安定的に開催している。来年度以降は、本ランチョンセミナーを起点とした、新しい研究へとさらに発展させていく必要がある。

研究センターも関わる公開講座として、地域に根付いていくプロセスとなる1年であったと評価できる。来年度以降も安定的な公開講座を実施し、地域における研究センターのプレゼンスを向上させていく必要がある。

村上学園に所属しているという、インセンティブ、帰属意識の向上と社会的に喫緊の課題である介護の問題について相談室を設けた。次年度以降はさらなる周知を行い、実績を上げたい。

[15] 教養教育委員会

2025年度は、「在学生の各種語学資格取得方案の策定と促進」、従来の留学生・渡日生の日本語習得に加え、日本人学生の英語学習に関して、以下の取り組みを行った。



1. 定期語学試験

国際教養こども学科1年次の基礎教養知識の習得を内容に含む科目において、昨年につき、基礎英語文法の復習やリスニング練習などを行った。学生の取り組む様子に応じて段階的に難易度を変えつつ、復習を繰り返すことにも重点をおいた。

留学生に対しては、留学生対象の教養科目において、各科目の内容理解が日本語の文法・表現習得に直結するよう、練習問題を解き考察を文章化する機会を作った。また JLPT 受験結果と各問の解答状況を学習の目安とし、日本語学習の意欲向上につとめた。

2. スピーチコンテスト（弁論大会）

留学生・渡日生に対して異文化交流室主催スピーチコンテスト（弁論大会）への参加を促し、指導を行った。2025年度は、審査のない「朗読」参加者（1年次留学生）が自ら選んだ自国の詩とその邦訳を朗読・紹介することで、それぞれの文化についての関心と理解が深まるようつとめた。

3. 自己点検・評価

本年度のスピーチコンテストへの本学学生の参加数は前年度に比して減少し、日本人学生による英語スピーチの参加者がなかったことは、本学学生の外国語習得と主体的なプレゼンテーションへの取り組みにおける課題となっている。一方日本語習得が初級段階の学生が多数、選考対象ではないが日本語詩の朗読を体験しており、今後のコンテスト参加を促していく。

本年度も、異文化交流室・国際交流センターによって留学生・渡日生と日本人学生が互いの言語を習得し交流を深めていけるような交流会が企画・実施されたことは、国際交流活動への学生の意欲を高めたと見られる。

海外短期留学の企画及び国内外の教育機関と共同開催形式のオンライン講演会・交流は、教養教育委員会として実施できなかったが、6月19日河南高等学校2年「探究学習」における本学国際教養こども学科留学生との交流授業に際し、担当の登り山先生のサポートを行った。今後も学生が現代の社会問題に関心を持ち、国際的視野をもって考察できるよう指導・支援を行いつつ、上記の企画実施に取り組む。

[16] IR委員会

1. 授業アンケート回収率の向上

令和6年度の学生生活に関するアンケートについて集計・分析・評価を実施し、令和7年度の学生による授業評価アンケート及び学生生活に関するアンケートを実施した。

授業評価アンケート項目を精査し、問うべき質問を追加した。授業内容がシラバスに準拠しているかなど、学生がより授業を評価する立場であることを認識できる質問を並べた。

アンケート入力時期は、各教室にアンケート入力時期であることを掲示し、学生のみならず教員に対してもアンケート入力時期であることを強く認識させ、回収率は大幅に向上した。

2. 自己点検・評価

短期大学部においては、学生アセスメントシートの運用が2年を超えたため、入試から就



職まで把握できるようになった。入試種別と学生の卒業・就職の関連など、分析方法の確立が次の急務となる。



Ⅲ. 学園財務の概要

1. 事業活動収支計算書（令和5年度から令和7年度）（単位 千円）

（教育活動収入の部）	令和7年度	令和6年度	令和5年度
学生生徒等納付金	1,343,592	1,363,499	1,372,140
手数料	22,743	25,228	27,669
寄付金	34,041	15,713	15,543
経常費等補助金	767,556	855,221	800,860
付随事業収入	104,999	113,867	98,401
雑収入	84,455	99,559	72,253
教育活動収入計	2,357,387	2,473,088	2,386,866
（教育活動支出の部）			
人件費	1,395,006	1,441,386	1,499,018
教育研究経費	976,783	908,044	914,229
管理経費	357,944	344,947	414,394
徴収不能額等	665	1,621	7,200
教育活動支出計	2,730,398	2,695,997	2,834,840
教育活動収支差額	△373,011	△222,909	△447,974
（教育活動外収入）			
受取利息・配当金	23,775	27,399	17,878
その他の教育活動外収入	-	-	-
教育活動外収入計	23,775	27,399	17,878
（教育活動外支出）			
借入金利息	17,930	22,555	21,825
その他の教育活動外支出	-	-	-
教育活動外支出計	17,930	22,555	21,825
教育活動外収支差額	5,845	4,843	△3,946
経常収支差額	△367,166	△218,066	△451,920
（特別収入）			
資産売却差額	-	6,850	20
その他の特別収入	415	3,666	61,026
特別収入計	415	10,516	61,046
（特別支出）			
資産処分差額	3,974	16,084	221
その他の特別支出	29,169	557	2,744
特別支出計	33,144	16,641	2,965
特別収支差額	△32,729	△6,125	58,081
基本金組入前当年度収支差額	△399,895	△224,191	△393,840
基本金組入額合計	△182,701	△162,714	△364,560
当年度収支差額	△582,596	△386,906	△758,400
前年度繰越収支差額	△6,934,387	△6,547,481	△5,789,081
基本金取崩額	-	-	-
翌年度繰越収支差額	△7,516,982	△6,934,387	△6,547,481
事業活動収入計	2,381,577	2,511,002	2,465,790
事業活動支出計	2,781,472	2,735,193	2,859,630


2. 貸借対照表（令和5年度から令和7年度） （単位 千円）

	令和7年度	令和6年度	令和5年度
固定資産	11,148,431	11,607,370	12,224,520
流動資産	438,297	567,214	339,033
資産の部合計	11,586,728	12,174,584	12,563,553
固定負債	1,460,349	1,631,812	1,784,285
流動負債	669,334	685,832	698,137
負債の部合計	2,129,683	2,317,644	2,482,422
基本金の部合計	16,974,027	16,791,327	16,628,613
繰越収支差額の部合計	△7,516,982	△6,934,387	△6,547,481
負債及び純資産の部合計	11,586,728	12,174,584	12,563,553

3. 財務比率（令和5年度から令和7年度） （単位 %）

	令和7年度	令和6年度	令和5年度
人件費比率	58.6	57.6	62.3
人件費依存率	103.8	105.7	109.2
教育研究経費比率	41.0	36.3	38.0
事業活動収支差額比率	△16.8	△8.9	△16.0



東大阪大学・東大阪大学短期大学部

〒577-8567 東大阪市西堤学園町 3-1-1

TEL (06) 6782-2824 FAX (06) 6782-2896